

日本の理工系修士学生の進路決定に関する意識調査

文部科学省 科学技術政策研究所

第1調査研究グループ

加藤 真紀

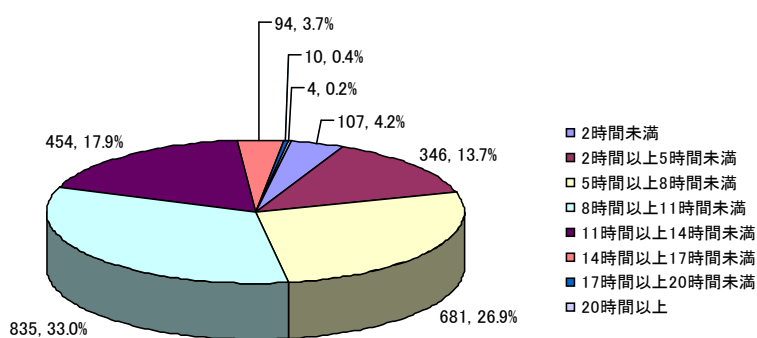
角田 英之

【概要】

本調査は、理工系を専攻する修士学生の進路選択に影響を与える要因の把握を目的として、日本国内の12大学で工学・理学・理工学・情報学等を専攻する2年生以上の修士学生を対象としてインターネットによるアンケートを実施した。これら12大学は、理工系分野の科学研究費補助金採択件数等により抽出された。調査期間は、2008年10月22日から2008年11月16日であり、有効回答数は2,531名となった。調査の主要結果の概要は以下の通りである。

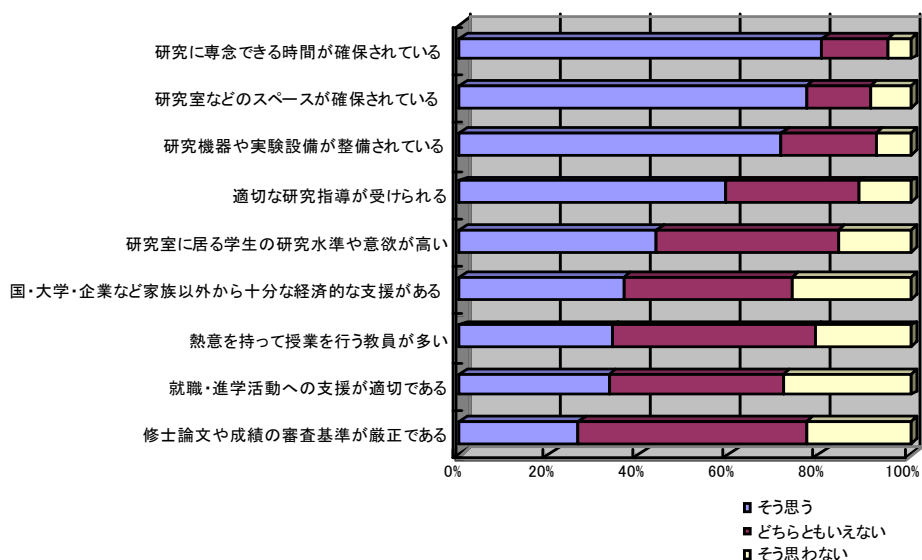
授業のある1日の平均的な研究・学習時間

- 半数以上の回答者が、1日の研究・学習時間として8時間以上を費やしている。11時間以上を費やす回答者も2割以上存在する。



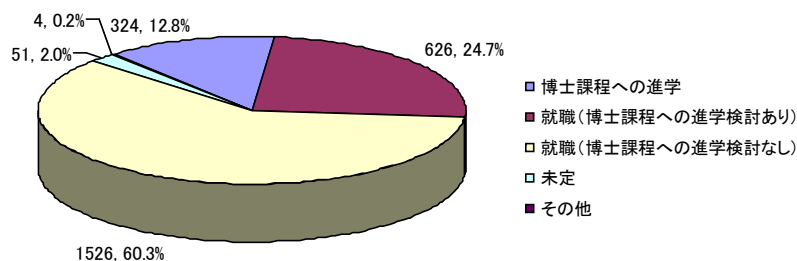
修士課程の教育・研究環境の評価

- 研究時間(80.2%)や研究室のスペース(76.9%)の確保、実験設備の整備(71.4%)は高く評価されている。他方、修士論文や成績の審査基準の厳正さ(26.3%)、就職・進学への支援の適切さ(33.3%)、熱意を持って授業を行う教員の多さ(34.0%)は相対的に低く評価されている。



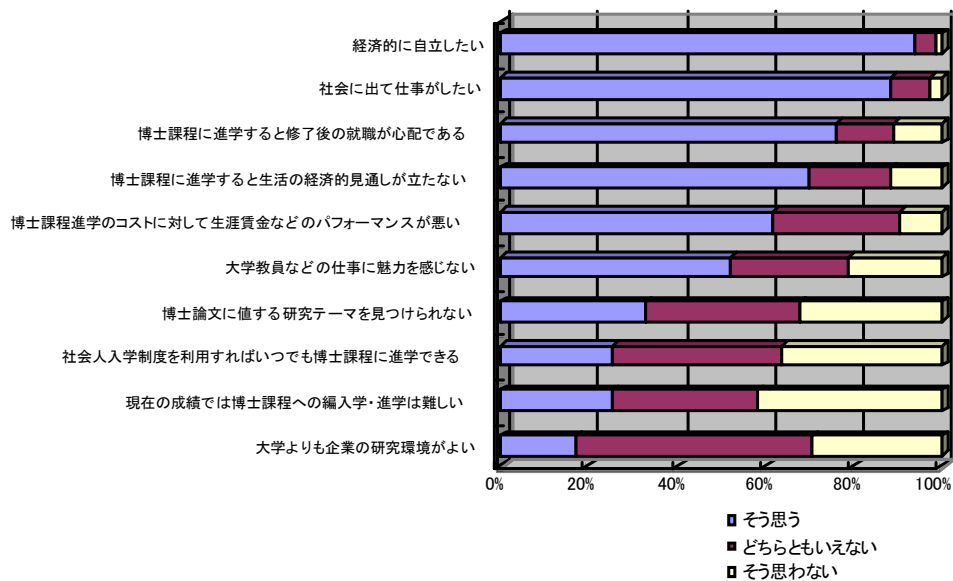
修士学生の進路と博士課程進学を検討

- 回答者 2,531 名の内、2,152 名の学生 (85.0%) は就職し、博士課程に進学するのは約 324 名 (12.8%) である。修士課程修了後に就職する 2,152 名の内、約 3 割 (29.1%) (ただし全体では 24.7%) が博士課程への進学を真剣に検討したことがあると回答している。



博士課程進学ではなく就職を選んだ理由

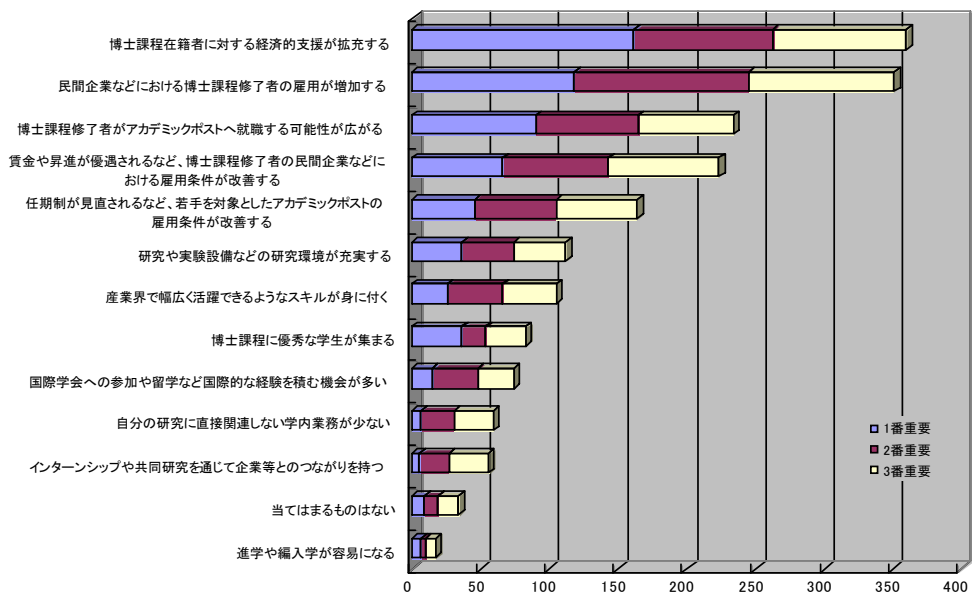
- 就職者 2,152 名が就職を選択した主な理由は、経済的な自立や就職志望等である (経済的に自立したい 93.8%、博士課程に進学すると修了後の就職が心配である 75.5%、博士課程に進学すると生活の経済的見通しが立たない 69.5%、など)。さらに、博士課程への費用対効果への疑問 (61.7%) も示されている。



博士課程進学を真剣に検討したことのある就職者が進学を考える際に重要な条件

- 博士課程進学を真剣に検討したことのある就職者は、博士課程への進学を考えるための1番重要な条件として、経済的支援の拡充を最も多く選択している(25.9%)。次に多く選択された条件は、民間企業による博士課程修了者の雇用増加である(18.8%)。

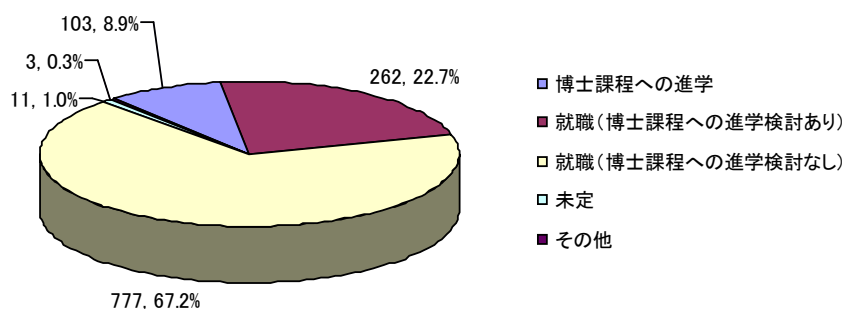
博士課程進学を真剣に検討したことのある就職者が博士課程進学を検討する際に重要と考える条件 (N=626)



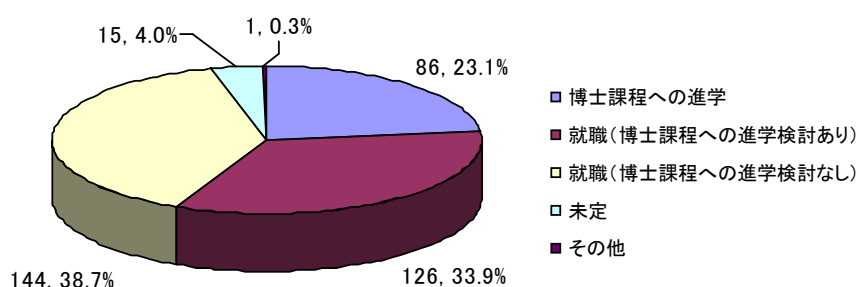
専攻分野による進路選択の差異(工学部と理学部の違い)

- 2つの専門分野の合計人数の違いに留意する必要があるが(工学系 1156名 理学系 372名)、理学系では博士課程への進学率が高く(工学系 8.9%, 理学系 23.1%)、就職者の中で博士課程進学を真剣に検討したと回答する率が高い(工学系 25.2%, 理学系 46.7%)。

工学系修士学生の進路選択(1156名)



理学系修士学生の進路選択(372名)



大学院修士課程の教育・研究環境についての要望や、進路選択を検討する過程で思うこと

- 自由記述では、博士課程進学をためらう理由として、まず博士課程在籍中の大学院での処遇や修了後に就職する可能性のある企業等における待遇の不十分さが述べられている。次に、現在の博士課程進学は容易であると認識されているため、進学がステータスとならないとの意見が多い。これに加えて、現状は博士課程進学の投資効果に疑問が持たれているため、博士課程進学が多様なキャリアへの対応も含め投資に見合う付加価値を付与する必要性が述べられている。
- 進路を検討するための適切な情報が不足しているとの認識から、関連情報を適切に得ることが要望されている。これら情報には、修士課程進学時には進学先となる研究室の情報や、博士課程進学を検討する際には博士課程修了後の進路や就職先などに関する情報等が含まれる。